

## 教職大学院における生徒指導・教育相談リーダー養成のための実習

～附属小学校特別支援学級の実習で、現職院生は何を学んだのか?～

A practical training for leader teachers in graduate course of  
guidance and school counseling

～What did the teachers learn through training in the special  
needs class of attached primary school?～

弘松英樹

納富恵子

西山久子

小泉令三

Hideki HIROMATSU

Keiko NOTOMI

Hisako NISHIYAMA

Reizo KOIZUMI

(福岡教育大学附属福岡小学校)

(福岡教育大学教育学研究科 教職実践講座)

(2011年1月31日受理)

生徒指導・教育相談分野のリーダー的教員を養成するために教職大学院で設定された「学校適応アセスメント実習」の、前半5日間の附属小学校特別支援学級での附属教員との連携に基づく実習の計画と実施の概要を報告し、10年以上の小学校勤務経験のある院生が、何を新たに学んだかについて、実習レポートの記述を中心に明らかにした。週1日8時間5回の短い実習期間であったが、観察中心のアセスメントに基づく指導計画立案・実施・振り返りの経験は、現職院生に、これまでの児童理解をこえる、個に応じた指導に必要な詳細で深いレベルの児童理解の必要性に気付かせる契機となった。

キーワード：教職大学院、学校における実習、附属特別支援学級、リーダー養成

### I 目的

教員免許状取得のための必須条件として、これまで主に学部段階での教育実習がおこなわれてきた。近年教員養成系大学の大学院においても、さらに高度な専門性に基礎をおいた教育実践力の向上をめざした実習科目が重視される傾向にあり、教職大学院では、「学校における実習」として必修化されている(中央教育審議会、2006)。小泉・納富(2009)は、「学校適応アセスメント実習」を教員養成系大学院で試行し、平成21年4月の福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(以下本教職大学院)設置以降、生徒指導・教育相談リーダーコースで「学校における実習」の一つとして本格実施し、平成22年度で2年目を迎えた。

「学校適応アセスメント実習」は、週1日8時間を前半5週間は、附属福岡小学校および中学校の特別支援学級で、後半10週間は、地域の協力校の通常の学級で実習を行う。実習生は、教育委員会から派遣された教職経験10年を超える現職教員が中心である。この実習の到達目標は、学校内のアセスメントと支援計画立案を指導できることにある。そのための学習内容・方法として、附属学校の特別支援学級においては、個別の指導計画に

もとづく指導の実際を体験し、その後、公立学校の通常学級で学級集団の状態、個人の適応状態、学力定着度、生活態度のアセスメントの実施と結果の整理や分析を行い、学習指導や学級経営に活用できるレポートを作成する。これをもとに、協力校職員に対して、子どもの個人単位の資料整理手法を提案することとした。

本研究では、平成22年10月より実施された本実習の前半5週の附属福岡小学校特別支援学級における実習の準備段階から実施の具体的取り組みを、主に大学院教員と附属教員の連携、附属教員が、考案した具体化された実習計画とその実施、およびこの特別支援学級での実習の効果を、実習生の実習記録および振り返りでの発言をもとに検証を行うことを目的とする。

### II 本教職大学院の学校における実習の計画・実施

#### 1 大学院教員の実習に向けての取り組み

##### 1) 組織的準備

本教職大学院では、実習に関する組織的な取り組みを行うために、大学院に独自に大学院教員で構成される「実習運営委員会」を設置し、実習中の問題への対応やきめ細かな指導を行うための方

策を検討している（国立大学法人福岡教育大学2008）。また、実習中の問題で、実習機関との連絡・調整・協議が必要な場合には、年3回開催される関係校の代表者と実習運営委員からなる「連携協力校等連絡協議会」で検討する。附属校の場合、実習の概要と配属については実習前年度に大学院教員が分担して附属学校等に出向いて事前説明と相談を行うと同時に、「実習運営委員会」で、実習の計画および実施後の成果と課題について分析検討したものを「連携協力校等連絡協議会」で報告し、実習校等から意見を聴取し改善に反映させている。

## 2) 具体的な準備の実施

実習生である院生に対しては、各実習の内容を示した「実習計画」を冊子として前年度に刊行し、入学時オリエンテーションで配布している。さらに各実習開始前には、具体的な注意事項も含めた実施要領を含む「実習の手引き」を作成し、大学院実習担当教員が、オリエンテーションを行う。「学校適応アセスメント実習」では、実習の事前学習である「予備課題」、実習生のプロフィール紹介と各院生がとりくむ「個別学習計画」の作成等を課し、評価の観点等を前もって実習生に示し事前教育を行い実習にのぞむ準備を行った。

実習実施年度の年度初めの4月には、大学院教員が、「実習計画」および「実習の手引き」をもとに、管理職に再度説明と相談に出向き、調整を行った。本実習ではに実習開始1カ月前には、大学院の実習担当教員（西山・小泉・納富）が実習校の直接指導を行う教員（弘松）に、「実習の手引き」をもとに説明し具体的な準備を進めた。

さらに最終調整の後の実習開始前に実習生を同伴し、附属学校へ事前挨拶にうかがい附属実習担当教員と対面し、最終確認を行う手順をとった。

## Ⅲ 附属福岡小学校特別支援学級における実習

### 1 大学院担当教員と実習校指導教員との事前協議

附属福岡小学校特別支援学級は、低学年、中学年、高学年の全3学級からなり、1学級5～6人の児童が在籍する。実習生は、各学級に1人から2人で配属された。

大学院担当教員から実習校指導教員は、一人の実習生に、一人の対象児童を選定することを依頼された。環境の変化に弱い児童も多く、実習生が支援することが、学習や適応に負担にならないことを配慮して選定を行った。

また、実習の目的を5日間で達成するためにも、授業の進行状況を最も知っている特別支援教育部主任の第一著者を中心となって実習計画の具体化を図ることとした。大学院教員は、実習中学級を訪問し、観察や指導を行った。

## 2 実習計画の立案について

院生が、計5回の実習を附属小学校で行うにあたり、以下の点を考慮して計画を作成した。

- ① 実習の目的である個別的教育支援計画や個別の指導計画の策定、及びそれを活かした指導が実践できるよう実態把握、計画の策定、実際の指導補助という段階的な実習計画を立てること。
- ② 個別的教育支援計画、指導計画の意義や策定手順、及び個別の支援の考え方など基本的なノウハウを理解してから実習に臨めるよう、講話によるオリエンテーションを行うこと。
- ③ 指導計画に基づく授業場面の支援だけでなく、日常生活における児童との関わり方、障害特性などを踏まえた児童理解の仕方等を身に付けることができるような場面を位置づけた日程にすること。
- ④ 院生一人一人に担当児童を決め、その児童の担任と1日を振り返る時間を設定したり、院生がお互いに支援の様子を見合い、学びあう時間を設定したりできるようにすること。
- ⑤ 実習を終え、実際の教育現場に出たときに役立つであろう現在の通常学級における発達障害のある子どもの状況や、特別支援教育の視点を活かした指導法などの講話による実習を行うこと。

## 3 実習計画の具体的な内容について

### (1) 5回の実習計画の内容

院生が、段階的に実習が行えるよう計5回の計画において、表1のように内容を設定した。

この計画において、第1、2回目で、実態把握を行い、第3、4回目で実際の指導補助を行うように段階を設けた。さらに、1回目で実態把握した後に担当教員と話し合い、不十分な点については2回目で追加の実態把握をする。また、3回目の指導補助の後にも担当教員と話し合い、反省点を明らかにすることで4回目の指導補助に生かせるようにした。

### (2) 個別の指導計画と授業についての講話

第1回目の実習で、実態把握を行う前に、個別的教育支援計画及び指導計画の意義、及びそれを授業にどう結びつけるかということについてオリエンテーションとしての講話を行った。以下が、その概要である。

- Ostep1 「個別的教育支援計画」を作成しましょう。
- (1) 「個別的教育支援計画」とは。
  - (2) 「個別的教育支援計画」を作るために、必要な情報はどこでどうやってあつめるのでしょうか。
- Ostep2 「個別の指導計画」に着手しましょう。
- (1) 「個別の指導計画」とは。
  - (2) 「個別の指導計画」を作るには、どんな内容を考えればよいのでしょうか。
- Ostep3 子どもの実態を把握しましょう。
- (1) 実態把握は、どんな方法ですればよいのでしょうか。
  - (2) 障害の特性を理解することも実態把握に大きく関わります。

## ○Step4 授業をつくっていきましょう。

- (1) どのように授業を考えていけばよいでしょう。
- (2) よりよい授業ができるためのポイントは何でしょう。

このように、個別的教育支援計画から授業までのプロセスを各ステップごとの留意点を中心に解説するとともに、今後の実態把握、補助指導の際の視点を与えられるようにした。(資料1)

## (3) 日常場面における児童理解を深める体験

1日の日程の組み方として、次のような時間を大切にしたい。

- 朝登校してきた児童を迎え、身辺整理の様相観察や支援、または会話によるコミュニケーション
- 中休み、昼休みなどの時間に児童と一緒に遊び、ラポートを確立しながら様相を観察する
- 給食、清掃などの指導時間に積極的に指導に入り、生活場面での実態を把握する。
- 運動会練習など行事への取り組みの補助を行い通常学級児童とのかかわり方を観察・支援する。

実習の中にこうした場面を位置づけることにより、実際の児童とかかわるスキルを身に付け、担当児童の様々な特性にも気づいて指導に活かすことができるようにした。

## (4) 1日の指導についての反省会の設定

院生の担当児童への支援について、その担任の教員と振り返り、次回に改善していくための反省会を毎回行った。また、第4回の実習においては、院生同士がお互いの指導補助の様子を参観し、反省協議会をもつようにした。その協議会の内容は、以下のようなものである。

- 1 進め方の確認(司会:弘松) 1分
- 2 授業補助としての自評及び質疑  
※ ふじ組の先生から、授業補助を行ってみて、自分の考えた支援の有効性がどうであったか。子どもの姿を踏まえて各自自評を述べる。  
(1人2～3分程度)
- ※ ふじ組担当の実習生が、自評を述べたあと、他の学級の实習生より質問・意見を出し合う。
- ※ この1学級のサイクルをおよそ15分で、3学級分を行う。
- 3 本校教員からの指導・助言  
※ 授業担当者として、ふじ組から順に指導・助言を行う。(1人3分程度)
- 4 大学の先生からの指導・助言と総括  
※ 大学の先生より、指導・助言及び総括をいただく。  
(お一人5分程度)

この協議会の中で、お互いに作成していた指導計画を基に、児童の実態に対して、どんなねらいをもって、どんな手立てを行ったのか。その有効性はどうか。などを話し合うようにした。そして、院生同士が自分のこれまで学んできたことを活かして、主張したり、互いに意見を交換したりできるようにした。また、実際の授業中の子どもの姿で、研究を深めていくことの大切さを実感できるようにした。

## (5) 通常学級での特別支援教育についての講話

第5回の実習で、実習のまとめとして、今後教育現場へ出たときに、通常学級の指導において

も求められている特別支援教育の視点を大切にしたい指導の考え方や、発達障害のある子どもの特徴とそのための支援の仕方についてプレゼンテーションを活用した講話を行った。以下が、その概要である。

- 1 発達障害とは
  - (1) 「発達障害」のとりえ方
  - (2) 「発達障害」の定義と分類
- 2 自閉症について
  - (1) 「自閉症」という言葉のもつイメージ
  - (2) 自閉症の症状
- 3 発達障害のある子どもに配慮した支援
  - (1) 発達障害のある子どもへのかわり方の基本
  - (2) 発達障害のある子どもに配慮した環境整備や指導法
- 4 特別な配慮を要する子どもへの対応の具体例

この講話のねらいとして、実習を終えて今後の指導に向けての心構えや考え方を醸成していくことができるように考えた。

例えば「障害」とは、決して特別なことではなく、通常学級においても様々な個性のある児童がおり、その個性の延長線上として連続的に考える概念であることを実習での体験と絡めて理解できるように考慮した。また、発達障害のある子どもにとって優しい授業や環境作りができれば、結果としてすべての子どもにとって優しい授業・環境になることや、障害のある人を支援するものの資質として、知識・技能・態度が大切であることなどを内容として取り入れた。

以上の実習指導の具体的計画については、表1に、講話の資料の一部については、資料として示した。(資料1、2)

## IV 現職実習生が実習から学んだこと

この実習に参加した、4名の現職院生(男性3名、女性1名、すべて特別支援学級担任の経験はなく、特別支援教育の推進に関して中心的役割をになったことはない。)の、2名の実習記録と5日目に行った全員の振り返り活動をもとに、この実習の成果の一端を明らかにする。なお、実習生は、実習日以外に週一回大学院で、グループでのスーパービジョンを実習担当教員から受けた。また、担当児童の心理教育的アセスメントに基づく教育援助方針、その過程、教育援助の自己評価などからなる最終報告書を作成するよう求められた。

## 【実習記録より】

Aさん 知的遅れのあるダウン症の児童を担当  
初日

「第1回の実習でこころがけたのは、授業の中で自分の担当の児童を良く見て(観察)理解し、どういう働きかけができる(支援)かを考えられるかです。また、積極的にコミュニケーションをとることです。…今日、主任の先生より実態把握の視点を教えていただいたので、この点に気づけて子どもたちを観察したいと思います。…」

2日目以降は、担当児童への遊びや学習補助、

給食の補助に加えて、通常学級との交流、中学校特別支援学級の見学、小学校の他学級の見学、実態把握に基づく試行的な支援等を経験した。

4日目

「反省協議会では、各自の今日の支援についての反省等について協議しました。子どもたちには、具体物を使ったり、何回か練習して本番にのぞませたりして理解させることがわかりました。個に応じた学習をしていくには、毎日の児童観察など児童理解が必要だと改めて感じました。」

5日目

「5回の実習を終えてたくさんのことを学びました。担当の児童をどれだけアセスメントできて、その個にあった支援をどのようにすれば力がつくのか、実際に行って見たが、難しかったです。その子の多様な情報を知ることが、支援につながると思いました。現場に戻った時、一人ひとりの児童をしっかりと見取れる力を、さらにつけていき、その子にあった支援を考えたいと思います。また、特別支援教育の視点をもとに学級づくりをしたいと思います。」

Bさん 知的な遅れのある自閉症の児童を担当

初日

「算数の授業は、…スモールステップで、ていねいにすすんでいるように感じた。さらに、必要な手立てとなると、すごく難しく感じる、自分の子どもたちを見る目をもっとみがいて、一人一人にあった手立てを作り出せるようにしないといけない。」

2日目

「実習2日目、ずいぶん子どもたちのかかわりが、スムーズになってきたと思う。しかし、B児が授業中おしゃべりをはじめたり、最初にこちらに集中させたりするための手立てをどうしたらいいか、まだまだつかめていない…」

（算数の指導のときに、試みた支援がうまくいかない経験をし、到達度のアセスメントについての助言を大学教員が行う。）

5日目

「5日間という短い期間であったが子どもたちから教えられることは、とても多く貴重な経験となった。C児に対する支援は、なかなかうまくいかなかった。課題をかかえたまま実習を終えなくてはいけないのは心残りである。今自分が思うことは、この子たちのペース・リズムと、自分の仕事と生活のペースのギャップをどのようにバランスをとっていったらいいのだろうかということです。5日間、毎日予定を調整して、組んでいたが、資料も用意いただきありがとうございました。これからの実践に必ず生かしていきます。」

【振り返りの発言から】

最終日の5日目には、それぞれが、実習で学んだことについて、振り返りを行った。

共通して、「大変密度の濃い実習だった。」「長年教員をしてきて、個に応じた児童の観察もできていると思っていた。この実習で、わずか40時間対象児とかかわって、わかったことに比べると、1年間をかけてかかわる児童のことについて、わかっていただろうかと反省する。」といったものだった。

10年以上という長い現職経験をもつ現職の院生であったが、特別支援教育を必要とする児童の指導の難しさに気づき、容易には解決できないことに直面した。系統的で集中的なアセスメントの経験を通じて、改めて個に応じた支援の重要性と、それが綿密な実態把握にもとづく指導計画のもとに成り立つことを実感したことが、明らかにあった。

## V まとめ

今回は、生徒指導・教育相談リーダーコースの、学校適応アセスメント実習の実際を紹介し、その成果を、実習生の記録と振り返りでの発言をもとに分析した。週1日8時間5回の短い実習期間であったが、アセスメントに基づく指導計画立案・実施・振り返りの経験は、現職院生に、これまでの児童理解をこえる、個に応じた指導に必要な詳細で深いレベルの児童理解の必要性に気付かせる契機となった。

障害児教育（現在の特別支援教育のルーツに当たる）は、教育の原点とよく言われる。院生が、この実習で得た経験は、特別支援教育に関する知識や経験を超越する普遍的な教育の原理について熟考する契機となった可能性がある。

もちろん、今回の実習は、綿密に計画された実習計画とグループでの振り返りを、週1回1時間30分確保したということも、思考を促す要因であった可能性もある

今後は、この実習の効果を維持しさらに完全を試みると同時に、一般化を検討していくことが課題である。

## 文 献

中央教育審議会 2006 今後の教員養成・免許制度の在り方について

小泉令三・納富恵子 2009 教員養成系大学の大学院における実習科目の計画と実施—実習の施行による検討— ファカルティ・ディベロップメント研究報告書 10 53-60

国立大学法人福岡教育大学 2008 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）設置計画に係る再補正計画書

表1. 平成22年度 教職大学院 「特別支援教育インターンシップ」「学校適応アセスメント実習」 計画表

平成22年9月10日(金)  
福岡教育大学附属福岡小学校  
特別支援教育部 主任 弘松 英樹

1日の流れ: 時刻		①10月6日(水)	②10月14日(木)	③10月20日(水)	④10月27日(水)	⑤11月10日(水)
実習の主な内容		担当児童の実態把握と個別の指導計画の立案作業	追加の実態把握と個別の指導計画の改善作業	各学級で同時に授業補助をして、担当から指導→次回改善	各学級の授業を、他の学級の実習生が参観→反省会で協議	実習期間の総括・評価
登校 ～ 朝の会	8:00 ～ 8:55	打ち合わせ 児童の様相観察 朝の会で紹介式	着替え・打ち合わせ 児童の様相観察 朝の会の参加	着替え・打ち合わせ 児童の様相観察 朝の会の参加	着替え・打ち合わせ 児童の様相観察 朝の会の参加	着替え・打ち合わせ 児童の様相観察 朝の会の参加
1時限目	8:55 ～ 9:40	校長講話 「学校経営の方針」	運動会全体練習参加 ※ 各担当学級を中心に補助	主任と打ち合わせ ※ 当日の授業と補助の仕方について	主任と打ち合わせ ※ 当日の授業と補助の仕方について	主任講話 「通常学級での特別支援教育について」
2時限目	9:50 ～ 10:35	主任講話 「個別の教育支援計画と授業について」	各学級での授業参観 又は 運動会練習参加	合同生単の指導補助 ※ 全学級一斉に	各学級での授業補助 ※ 担当児童について指導の補助	レポート作成等 ※ 実習を終えるにあたっての事務
中休み	10:35 ～ 10:50	着替え 児童の様相観察	児童の様相観察	児童の様相観察	児童の様相観察	児童の様相観察
3時限目	10:50 ～ 11:35	各学級での授業参観 ※ 担当学級での授業参観と実態把握		各学級での授業補助 ※ 担当児童について指導の補助	各学級での授業補助 ※ 担当児童について指導の補助	各学級での交流 ※ 実習生と子どものお別れ会
4時限目	11:45 ～ 12:00	授業参観のまとめ ※ 大学の先生と一緒に		指導体験のまとめ ※ 大学の先生と一緒に	指導体験のまとめ ※ 大学の先生と一緒に	
給食 昼休み 清掃	12:00 ～ 2:15	給食指導 児童の様相観察 清掃指導	給食指導 児童の様相観察 清掃指導	給食指導 児童の様相観察 清掃指導	給食指導 児童の様相観察 清掃指導	給食指導 児童の様相観察 清掃指導
5時限目	2:15 ～ 3:00	指導計画の立案 ※ 参観をもとに個人作業	教生授業の参観 ※ 各担当学級の授業参観	教生授業の参観 ※ 各担当学級の授業参観	各学級での授業補助 ※ 担当児童について指導の補助	全体でのお別れ式 ※ 実習生と子ども全員での式
6時限目	3:10 ～ 3:55		指導計画の改善 ※ 本校の計画と比較して検討・改善	指導計画の見直し ※ 指導体験のもとに見直し	反省会 ※ 授業を振り返っての話し合い	実習のまとめ ※ 副校長、大学の先生より
放課後	4:00 ～ 5:00	指導・打ち合わせ ※ 作成した計画をもとに話し合い	指導・打ち合わせ ※ 改善した計画をもとに話し合い	反省会 ※ 授業を振り返っての話し合い		

## 資料1

平成22年度 福岡教育大学 教職大学院

「特別支援教育インターンシップ」  
「学校適応アセスメント実習」  
(第1日目 資料)

- 本日の日程 p.1
- 特別支援主任 講話資料 (2校時) p.2~p.7
- 資料 国語科・算数科の指導内容表 p.8~p.9
- 参観資料 (3校時) p.10~p.13

期日 平成22年10月6日(水)

会場 福岡教育大学附属福岡小学校  
特別支援学級棟

## ○ 本日の日程

1日の流れ	時刻	10月6日(水)の日程
実習の主な内容		担当児童の実態把握と個別の指導計画の立案作業
登校	8:00	職員朝礼での挨拶 (南校舎職員室)
朝の会	8:55	朝の会での紹介式 (北校舎音楽室)
1時限目	8:55 ~ 9:40	校長講話 (応接室) 「学校経営の方針」
2時限目	9:50 ~ 10:35	主任講話 (応接室) 「特別支援教育の基本的な考え方 ~個別の教育支援計画と授業について~」
中休み	10:35 ~ 10:50	着替え 児童の様相観察 (運動場)
3時限目	10:50 ~ 11:35	各学級での授業参観 ※ 担当学級での授業参観と実態把握 ふじ組 (算数) 指導者 堀 亮輔 さくら組 (国語) 指導者 松尾 京子 梅組 (生活単元) 指導者 倉富 護
4時限目	11:45 ~ 12:00	授業参観のまとめ (応接室) ※ 大学の先生方と一緒に
給食 昼休み 清掃	12:00 ~ 2:15	給食指導 (各担当教室) 児童の様相観察 (運動場) 清掃指導 (北校舎)
5時限目	2:15 ~ 3:00	指導計画の立案 (応接室) ※ 参観をもとに個人作業
6時限目	3:10 ~ 3:55	
放課後	4:00 ~ 5:00	指導・打ち合わせ ※ 作成した計画をもとに担当学級の授業者と話し合い

平成22年度 福岡教育大学 教職大学院  
「特別支援教育インターンシップ」「学校適応アセスメント実習」講話資料

特別支援教育の基本的な考え方  
~個別の教育支援計画と授業について~

福岡教育大学附属福岡小学校  
特別支援教育部 主任 弘松 英樹

## ■ はじめに

- 本校の特別支援学級には、こんな子どもたちがいます。
- ・同じ年齢の子どもよりも、ゆっくりと学ぶことで、少しずつ身に付けていく子ども
  - ・気持ちや考え方を、言葉にして人に伝えるのが難しい子ども
  - ・人の気持ちを察したり、何をしたいか分からないのかに気付いたりすることが苦手な子ども
  - ・自分の行動をコントロールすることが苦手な子ども
- ふじ・さくら・梅組の子どもたちの顔や名前を早く覚えて、仲良くなってください。

## ■ 特別支援教育について学ぶ意義

(理由1) 現在、全国の中小学校の通常学級にも平均6%の発達障害のある子どもがいるのです。

・発達障害とは?

- 知的障害 ○ 広汎性発達障害 ○ 発達の一部障害 (学習障害 (LD)、コミュニケーション障害、運動技能障害) ○ 注意欠陥/多動性障害 (ADHD)

(理由2) 「特別支援教育」の考え方は、「教育の原点」なのです。

→ 二人の困っている子どもを大切にすると、それは結果としてすべての子どもを大切にすることになるのです。

## ■ 特別支援学級ではどんな授業が行われるのでしょうか。

- 子どもが興味や目的意識をもちやすい題材を選びます。
- 一人一人の学習内容や目標を個別に設定します。
- その子どもにあった、教材・教具を準備します。 (個の実態に応じた支援)
- 「やった」「できた」という気持ちを味わわせます。

## ■ 実態の違う子どもに、どうやって一緒に授業をするのでしょうか。

【算数科 「ながさ」の学習の例】

	I段階	II段階	III段階
直接比較	長い、短い分かる。	基準線に端をそろえて比較する。	自分で端をそろえて比較する。
A組	A組の内訳	B組	B組の内訳
間接比較	一方の長さを写し取って他方と比べる。	任意単位をいくつ分で作る。	適切な任意単位を選んで比べる。
測定	普通単位が読める。	普通単位を使って長さを表す。	定規などの道具を使って長さを測る。

## ○ step1 「個別の教育支援計画」を作成しましょう。

(1) 「個別の教育支援計画」とは、どんなものでしょう。

「個別の教育支援計画」とは・・・学年前か成人期まで一貫した支援を実現するためのツールとして考えられたものであり、教育のみならず、保健・医療・福祉・労働等のさまざまな領域からの取り組みを含めて関係機関の連携連携協力のもとに策定するものである。学校、家庭、支援機関、それぞれにおける支援内容を示し、保護者も加わってその詳細を行った上で進学・就労に向けた引き継いでいくことを想定している。

(2) 「個別の教育支援計画」を作るために、必要な情報はどのようなものでしょう。

- ・保護者への協力をお願いする。
- ・療育施設や園などから資料をもらったり、直接電話で話したりする。

## ○ step2 「個別の指導計画」に着手しましょう。

(1) 「個別の指導計画」とは、どんなものでしょう。

「個別の指導計画」とは・・・学校の教育課程や学級・学年の年間指導計画を個々の児童・生徒のレベルで具体化したものであり、児童・生徒一人ひとりの教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法を盛り込んだもので、学校と保護者が連携して作成する児童・生徒一人ひとりの指導計画のことである。

(2) 「個別の指導計画」を作るには、どんな内容を考えればよいのでしょうか。

- ・実態把握と将来像の設定
- ・2種類の資料・・・個別の年間計画と学級の年間単元計画

## ○ step3 子どもの実態を把握しましょう。

(1) 実態把握は、どんな方法ですればよいのでしょうか。

- ・実態の判断基準をもつこと・・・指導内容表 (チェックリスト) の活用
- ・実際にさせてみて、どんなことに困難さがあるのかを観察する。
- ・発達検査の実施も一つの方法です。
- ・日常生活や休み時間の様子などから分かることもあります。

(2) 障害の特性を理解することも実態把握に大きく関わります。

「特性」= もって生まれた特徴  
「障害」= 「特性」から生じる適応行動の問題

## 【知的障害】

(1) 知的特性・・・一般に、知的障害者は言語性テストよりも動作性テストの方ができがよいといわれている。しかし、すべての知的障害者が動作性優位であるという意味ではなく、動作性優位者が言語優位者・両側者よりも多いと考えられる。

- (2) 知覚特性→視覚機能については対象となる図形の数が多くなったり、複雑になったり、刺激図形に方向性が伴うなどの場合は、ダウン症児は非別応対で困難になることが観察される。また形と色など、対象の属性に注目して分類して抽出することには困難を示す。聴覚機能について、例えば目隠しした状態で手で触るだけで図形の区別がつかないについては、ダウン症児はかなりの遅れがあることが指摘されている。

- (3) 記憶特性→短期記憶に貯蔵される記憶容量は、知的障害をもつ人はその容量が少ないことが明らかにされている。記憶方略として、知的障害のある人は、リハーサル、体制化、精緻化といった方略を特定の課題については、かなりの程度まで訓練できる。知的障害のある人が記憶方略をうまく使えない原因はメタ記憶（自分の記憶に関する意識）にあると考えられている。

#### 【自閉症】

- (1) 対人面→幼児期には他者に関心を払おうとせず、視線を合わせようとしにくいことが多い。発達に伴って視線は合うようになるが、発達年齢に応じた仲間関係をつくることはできず、孤立していることが多い。年齢がすすむと人への興味は生えてくるが、それは一方的で独りよがりなものであり、誤解されることも多い。

- (2) 言語面→高度・中程度の知的障害が認められる自閉症児の中には発語がない、喃語レベルの発語にとどまることが多い。言葉を話すことができてモイム・ネーションがおかしい。局所等の使用がうまくできないなどが特徴としてあげられる。また、CM等の即時性反響語（「コアラ」）、逆説性反響語、独り言や自分だけの造語など他者とコミュニケーションするために言葉を使用することが難しい。

- (3) 行動面→自閉症児は、程度の差はあるが必ず何かに強迫的にこだわるという特徴をもっている。それは自分自身の行動や身体のかし方に関するこだわりや、同一性保持といわれるものや道徳に対するこだわり、さらに思考様式についてのこだわりなど多様である。極端な偏食なども、このことからくることが多い。

※ あくまでも一般的な傾向であり、子どもの特性は一人一人異なる。

※ このあと、参観する授業で、どんな視点から実態を把握すればよいか、参観資料を見て、考えてみましょう。

#### ○ step4 授業をつくっていきましょう。

- (1) どのように授業を考えていけばよいのでしょうか。

- ① 子どもの実態に応じた学習内容や目標を設定します。

・「今、できること」と「もう少しできそうなこと」の見極めが大切。

- ② 学習内容や目標を達成させるための活動や題材を考えます。

- ・子どもの興味・関心のある事象から  
・子どもの生活経験から  
・学校の行事や、季節の行事などの関連から

- ③ 具体的にスモールステップを作り、順序計画を作ります。

- ・少しずつ、少しずつ学習することが高まっていくように  
・活動の目的や意識が連続するように  
※ 特別支援学級の指導原理・・・変化と繰り返し

- ④ 1時間ごとの活動の流れを考えます。

- ・1時間の中にも「変化と繰り返し」があるように。  
・毎時間同じような活動をして、「学び方」を身に付けさせます。  
→ 自分で学習を進めていくことができることの大切さ

- ⑤ 個別の内容に応じた教具や手順を考えます。

- ・同じ内容の学習でも、段階によって教具を使い分けます。  
・手順表を作ってあげることが有効な場合があります。

- (2) よりよい授業ができるためのポイントは何か。

#### ○ 目的意識と見通しを大切に

私たちは、日常の仕事や生活上の些細なことでも、先の見通しを考えて、自分が今、何をすべきかがわかって行動している。しかし、知的障害のある子どもには、先のことを見通すことを苦手としている子どもが多い。子どもたちは、「～したい」という目的意識をもって、そこに至る道筋がわかることで、安心して学習に取り組むことができる。よって目的や見通しは大変重要である。

#### ○ 準備の中で個に応じた指導を

特別支援教育の指導においても最も大切なことは、「個に応じた指導」である。しかし、「個に応じた指導」は、個別指導と同じ意味ではないということに気を付けたい。学級の子どもたちが、共通した目的意識をもちながらも、一人一人の目標設定や、使う教具、つまづきに対するヒントなどは個々の実態にあったものを用意することが重要である。

#### ○ 成功体験と賞賛のある授業を

子どもたちにとって、学習中に「自分でできた」「がんばったからできた」という成功体験を味わわせることは、「自信」を培う上でとても大切である。そして、その成功感を感じさせるためには、賞賛が大切である。言葉による賞賛だけでなく、表情や仕草、励まし、スキンシップなどを加えた賞賛を大切にしたい。

#### ○ 自己評価機能

自分のしたことが、正しいのか、間違っているのかを子ども自身がわかることは、とても重要である。そのことを可能にする教具などの仕組みを「自己評価機能」と呼ぶ。  
自己評価機能をもたせた教具を準備し、活動の手順を明確に示し、そうした学習の仕方を学び方として定着させることが、特別支援学級での一斉授業を成立させる鍵である。

#### ■ 個の実態に応じた支援とは、どんなものなのでしょう。

##### 【国語の例】

- 文字を読んだり、書いたりすることが苦手な子ども  
・形の大きさや向き、重なりなどがとらえられない。

※ 50音表の活用、  
字割りによる支援

- ・横が長いところの違いに注意を向けられない。

※ 間違えやすい部分へのマーキング  
文字カードによる練習

- ・目と手の協応運動が苦手である。

※ マスの大きさの工夫、  
なぞり書きのステップ  
(実線→点線→部分)

##### 【算数の例】

- 数を数えたり、計算したりすることが苦手な子ども  
・とばして数えたり、多く数えすぎたりしてしまう。

※ 数え箱の活用、  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
数える対象の配置の工夫

- ・計算間違いが多い。当てずっぽうで答えている。

※ その子にあった計算方法のパターン化  
2 + 4 = 5?  
2 + 4 =  
○○ ○○○○

#### ■ 子どもとかわる時に、大切なことは、どんなことなのでしょう。

##### 【子どもと関わる際の基本的な5つのポイント】

- 1 子どもの言うことを聞いてあげましょう。受け入れてもらえると信頼が生まれます。
- 2 子どもがある行動をしたときに、まずはそれを認め、ほめてあげましょう。そうすると次の行動に自信がもてるようになります。
- 3 子どもをよく観察して、次にしそうな行動を予測してみましょう。行動を見ずして、先手を打って予防すれば、子どもを注意することは少なくなります。
- 4 子どもの目線におりて、子どもと接近しましょう。愛情は接近によって生じ、ともにいてくれることで子どもは安心感を感じます。
- 5 子どもとスキンシップをとりましょう。子どもに対する愛情は身体的なものを通じて伝わり深められています。

##### 【子どもに話す時のポイント】

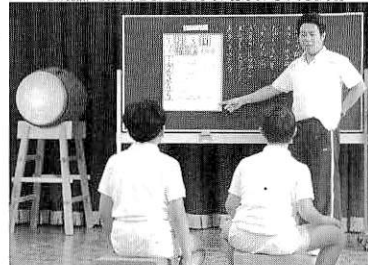
- 短く、簡単な言葉で、具体的に
- 表情や声の抑揚を豊かに
- 身振り手振りや、演技を交えて



人間は、外界から入ってくる情報の約7割を視覚から得ています。音声による情報（音の大きさや高さ、抑揚など）は約2割。言語による情報（相手の話している言葉そのものの意味）から得ている物は、わずか1割もありません。  
話す言葉だけで相手に通じようと思うのではなく「話す側の思い込み」なのです。

【その子の見え方、考え方に寄り添おう！】

「この光景、2人の子どもにはどのように見えているのでしょうか？」



## 資料 2

平成22年度 福岡教育大学 教職大学院

「特別支援教育インターンシップ」  
「学校適応アセスメント実習」  
(第5日目 資料)

○ 本日の日程

p.1

○ 講話資料

p.2~p.10

期日 平成22年11月10日(水)

会場 福岡教育大学附属福岡小学校  
特別支援学級様

○ 本日の日程

1日の流れ	時 刻	11月10日(水)の日程
実習の主な内容		実習期間の総括・評価
登校 ～ 朝の会	8:00 ～ 8:55	着替え・打ち合わせ 児童の様子観察 朝の会の参加
1時限目	8:55 ～ 9:40	レポート作成等(応接室) ※ 実習を終えるにあたっての事務
2時限目	9:50 ～ 10:35	主任講話(応接室) 「発達障害の理解と支援について」
中休み	10:35 ～ 10:50	児童の様子観察
3時限目	10:50 ～ 11:35	各学級での交流 ※ 実習生と子どものお別れ会
4時限目	11:45 ～ 12:00	打ち合わせ・事務作業等 ※ 大学の先生と一緒に
給食 昼休み 清掃	12:00 ～ 2:15	給食指導 児童の様子観察 清掃指導
5時限目	2:15 ～ 3:00	※ 着替え 全体でのお別れ式(音楽室) ※ 実習生と子ども 全員での式
6時限目	3:10 ～ 3:55	※ 応接室の片付け 3:30～ 閉講式(実習のまとめ) ※ 副校長、大学の先生より
放課後	4:00 ～ 5:30	

福岡教育大学教職大学院 「特別支援教育インターンシップ」  
「学校適応アセスメント実習」 資料

## 発達障害の理解と支援について

現在、小・中学校に通う約6、3％の子どもの、何らかの発達障害が  
あるといわれています。通常学級において、特別な配慮を要する子どもが  
いて、特別な支援を行うことは、その子のためでしょうか。例えば、見  
通しルールなどをわかりやすく視覚的に提示したり、指示や説明を端的  
に順序立てて話したりすることによって、その子だけでなく学級全体の  
規律が整い、みんなが安心して過ごせる教室になるところがあります。

特別支援教育は、決して「特別」なことではなく、一人ひとりの子ども  
を大切に、その子どもの可能性を最大限に伸ばすべく、個に応じた指導  
をしようとする。いわば「教育の原点」です。一人ひとりが大切にされて  
いる学級、学校は、子どもたちもお互いを大切にしようとするのではない  
でしょうか。特別支援教育に触れることを通して、障害のある子どもを含  
めた子どもも理解の指針を学んでいきたいものです。

福岡教育大学附属福岡小学校  
教 諭 弘 松 英 樹

## 1 発達障害とは

## (1) 「発達障害」の考え方

スーパーの店内を走り回ったり、じっと静かに  
人の話を聞くことができないいつも先生に怒ら  
れたりしている子どもがいます。そうした子ども  
たちは昔もいましたが、近年ではさらに増えてき  
ています。かつては、「彼がしっかりしつけないか  
いから」と、親が責められることがほとんどで  
した。そして、こうした子どもは「困った子ども」  
といわれることもありました。

しかし、最近になって、こうした子どもたちの  
行動はしつけの不足からくるものではなく、  
【図1 発達障害についての基本的な考え方】  
脳の機能に問題がある場合があることがわかってきました。佐藤氏は、子どものもつ「困り感」と  
いう言葉を捉え、実は「困った子ども」ではなく、本人が一番「困っている子ども」であることを  
示しました。

「発達障害」は、目に見える身体的機能の障害ではないため、その行動の特徴からどのような発達  
障害であるのかを見極めることが難しいのが現状です。

## (2) 「発達障害」の定義と分類

杉山忠昭氏は、発達障害の定義を次のように述べています。

「発達障害とは、子どもの発達の途上において、何らかの理由により、発達の特定の領域に、社会  
的な適応上の問題を引き起こす可能性のある困りを生じたもの」

この定義には、次の2つの基本的な考え方が含まれていると考えます。

- ① 人間の発達の途上には、個人差や偏りがあるものであり、正常か異常かという二群分け  
を行って、発達障害のある児童は異常であるというは誤りである。障害の有無は、単純に二  
分することのできない連続的な概念である。
- ② 発達障害とは、子どものもつ発達途上の困り、生活上個別的配慮を必要とするか否か  
という判断において、個別的配慮をした方がよりよい発達が期待できることを意味している。

発達障害には、どんな障害の種類があるのかという点については、図2のように分類がなされて  
います。2005年に施行された「発達障害者支援法」において、法律にも明示されています。



【図2 発達障害の下位分類】